北海道サッカー界の重鎮＝柴田教授

進藤賢一

１９３３年（昭和８年）生まれの柴田勗（つとむ）さんは２００３年（平成15）３月定年で札幌大学を退職された。大学では36年の長きに渡って身体文化論や体育講義、実技を担当した。開学当初の赴任でもあり、札幌大学に体育館や各種競技施設の設計、構築や各種運動部の強化に力を注いで本学の知名度拡大に貢献した。

柴田さんは新十津川で小中学校時代を過ごし、高校は隣町の滝川西高に学んだ。ボクシング部に所属し、プロのボクサーの指導を受けていた。このときプロ世界の厳しさ、勝敗の価値差、人間味のある指導などの薫陶を受けた。

進学は北海道学芸大学札幌分校芸能体育科を選んだ。ボクシングに磨きをかけることと、教員になることを目指したのである。

寮生活が始まった。寮監に極東オリンピックサッカー代表選手を経験した原崎正助教授がいて毎日サッカー特別講義を受けた。それも先生持参の１升瓶片手になされたものだった。原崎助教授はサッカー名門静岡県の志太中学

（現藤枝東高校）から東京高等師範学校を経て北海道学芸大学に赴任した教官で、北海道サッカーの育ての親的存在であった。

進行方向がボクシングからサッカーに変わったのは原崎助教授の烈々たる勧誘によるものだった。

サッカー部に籍をおいて東京で行われた天皇杯サッカーや全国大学選手権に出場した。

大学卒業と同時に札幌聾学校（現在の札幌北高に隣接）に赴任、12年間勤めた。

この間、聴力障害の生徒にサッカー訓練をさせ、全道中学校大会優勝を果たしている。

1966年（昭和41）秋、本学創設者の1人である安保常治教授に、ある寿司屋で出会い、札大赴任を勧められた。同年12月には大学浪人中のサッカー選手13人に働きかけて彼らに入学を勧めた。大学創立前夜のできごとである。そのときのメンバーには藤山氏、渡辺氏、紺野氏、鈴木氏（共に札幌南高出身）、福江氏、中川氏（共に札幌北高出身）などが含まれていた。

柴田さんの指導で本学サッカー部は開学2年目の68年（昭和43）から17年連続の全道優勝、18年目に王者の座を北大に奪われるが、その後また10年連続優勝という金字塔を打ち立てた。尚、柴田さんは創部11年目から総監督として札大サッカー部にかかわってきた。

本学に体育特待生制度がなかったため、室蘭大谷高をはじめ最強チームのトップクラスが本州の大学に引き抜かれていく中、賢明の指導で破竹の勢いをつけたのである。

それでも、北海道サッカー協会審判委員長や協会競技役員の知名度を生かし、可能な限り高校サッカー部から優

秀選手を集める努力を惜しまなかった。

１９７０年代には本学のスポーツ黄金時代が来る。サッカーは全国大学選手権（１９７６）で４位、天皇杯サッカー（１９７８）では新日鐵や読売クラブ（後のベルディ東京）を破ってベスト８に進出するなど先鞭を切った。

この時期は、野球も全国大学選手権４位、体操が全国５位、バスケットボールは全国８位の奮闘振りだった。

本学から優秀な選手も出した。75年経営学部出身の来海章氏は「富士通」でプレーし、日本リーグ「富士通」の監督になった。湘南ベルマーレ（中田英寿所属）の前身、フジタ工業に入った78年経営学部卒業の野村貢氏はナショナルチームメンバーとして活躍した。ブラジルからの第1期留学生のネルソン松原氏はJリーグ「ヴィッセル神戸」のコーチングスタッフとして、また第3期留学生のアデマール・マリーニヨ氏は「フジタ工業」から「横浜マリノス」の前身、「日産自動車」でプレーしていた。かれは現役引退後全日本フットサル監督に就任した。

柴田さんは、今日のようにサッカーの国際化の進んでいない１９７０年代から、サッカー先進国ブラジルを通算15回訪れ、様々なブラジルサッカーの先進性について学び、指導に役立ててきた。１９７３年（昭和48）サンパウロ体育大2年のネルソン松原、サンパウロカソリック大2年のセルジオ門岡を本学に留学させ、サッカー部に所属させてブラジルサッカーの精神と技術を本学学生に普及させた。以後6年間に6人のブラジル人を留学させている。これは、本学外国人留学生の草分けであった。

ブラジル人留学生は、単に個人技中心のブラジルサッカー技術を残していっただけでない。高度な身体文化性をブラジルから日本に導入した、といっていい。

本格的ブラジルサッカーは、ドリブルワークのうまさに加え、高度なフェインティング（相手をきりきり舞いさせる幻惑の技）そして、トラッピング（ボールコントロールテクニックで、自分のものにしたボールは相手に取られない技術）であった。個人技を組織の中に組み入れていくことであり、日本のような粗雑なものでなく緻密に組み立てられたものだった。この面で当時の日本は驚くほど遅れていたから、ブラジル人留学生の残していったものは大きい。

南米から持ち込んだもう1つは「フットサル」である。柴田さんは南米からこの室内サッカー競技を日本に持ち込んだとき「サロンフットボール」と命名した。もともとはラテン語系の「Futebol de Salãn」を語源とする「5人制室内サッカー」でブラジルが世界の普及国であった。その後、南米流とヨーロッパ流を世界標準化するためＦＩＦＡは統一名を「フットサル」としたのである。

北海道は冬が長い。サッカー訓練環境を変える必要がある、と柴田さんは考えた。

「フットサル」は1930年代、ブラジルの隣国ウルグアイで誕生した。だからウルグアイは室内サッカーの発祥地ともいう。柴田さんはフットサル創始者の1人であるＤＲ・セリアニ氏（当時92歳）に会い、初発時からの変遷に触れている。

ＹＭＣＡのウルグアイ指導者たちがアメリカ合衆国を訪問したとき、子供達が室内でバレーボールやバスケットボールを楽しんでいるのを見た。彼らは、これらの球技をウルグアイに持ち込んだが、子供達はすぐにボールを蹴ってしまいバレーやバスケにならない。子供達のフットボール熱に押されてやむなく弾まないボールで5人制の室内

サッカーをはじめることになった、という。

室内サッカーはウルグアイよりも隣国ブラジルで爆発的人気となった。いまではブラジルでもウルグアイでもサッカーと並んで人気があり、若者達の間では昼はサッカー、夜はフットサルが合い言葉になっている。

ブラジルからの留学生達は、日本にこのフットサルをも持ち込んだ。ドリブルワークなどサッカーの個人技練習にもってこいだった。フットサルは雪国での普及を狙った筈だったがブラジル人2世など出稼ぎ労働者の多い北関東、東京がフットサルの高度化地域になり、いつしかフットサルのメッカ北海道が忘れ去りつつあることを柴田さんは憂いている。

1年留学を含む15回のブラジル訪問で、柴田さんはパラナ州のクリチバ、ロンドリナ、マリンガ、ミナス州のベロホリゾンテ、パライバ州のレシフェのクラブチームやプロ選手を訪ねサッカー事情や地域スポーツクラブの実態などを調べた。柴田さんは、プロ・アマの現場言葉と高度な技術との関連、サッカー用語の変容、ブラジルサッカーの伝承性などについて「ブラジルサッカー総覧」にまとめ２００１年（平成13）出版し、北海道新聞の紙面を飾った。

他方では月刊「北のサッカーアンビシャス」を主宰し、3年になる。これはサッカー専門誌でサッカーの国際情報、サッカー論、コンサドーレ札幌支援記事なども掲載する。北海道サッカー協会13支部でおこなわれた地方大会などの競技結果記事は特に人気を集めている。

札幌にプロのサッカーチームをつくりたい、柴田さんは日頃口癖のようにいっていた。「コンサドーレ札幌」が産

声を挙げたが、これは企業ベースで設立された。ワールドカップ日本開催と「コンサドーレ札幌」設立の時期がほぼ一致した頃である。柴田さんはJリーグを目指すためのレポートを書き、情報を多面的に流した。Jリーガーを目指すサッカー少年達のために「サッカー訓練センター」を日本とブラジルにもつくった。

柴田さんはいま、「コンサドーレ札幌」と「北海道日ハムファイターズ」を支援する「総合型地域スポーツクラブ」の創出を目指している。

大学は退職したが、サッカー人生はまだ花盛りの柴田さんである。

岡田武史さんの札大客員教授が02年実現した。〝岡ちゃん〟人気は凄く、学生への講義や市民向け討論会などで多くの視聴者を動員した。

1977年（昭和52）の全国学生選手権は準々決勝で優勝候補の早稲田大と札大の間で行われ、本学が勝利した。そのとき柴田さんは札大監督、岡田さんは早稲田大の選手だった。そのころからの岡田武史さんとのつきあいである。

それまでコンサドーレ札幌の監督であった〝岡田武史さんが札幌を去るのは惜しい。知的文化人を札幌に留めよう〟と山口昌男学長から指示が下った。岡田さんは〝地域や学生からの講演はすべてお断りしている〟と難色を示したが、柴田さんの説得で「札大客員教授」が実現した。

定年退職にあたって柴田さんは次のような談話を寄せた。

〝札大発足からしばらく挫折の時代が続いた。学生が集まらず定員割れの状況が続いたのである。学生募集停止や廃校も囁かれた。苦境に対しみんなで力を合わせて闘い、時代を切り拓いた。みんなが自己をなげうってやってきた。学生も頑張ったと思う。構成員全員が粉骨砕身して働いた。

しかし、いまはすっかり閉塞状態になって、やることが報われない。一生懸命やっても将来に光明が見えない。規模が大きくなり、動きが鈍っているのだろう。やる気のあるひとが過半数いればなんとかなるのだが残念なことだ。再生札大には何より勝れたリーダーシップが求められる〟

（比較文化学科長）